

# 絵本のためのじみ

オーストラリアにて白人入植がはじまったのは二百数十年前。先住民アボリジニの人々の悲劇はこの時からはじまりました。虐殺が繰り返され、その後は「子どもを市民的に育てる」ため白人が先住民の子どもを奪いとる、という非常に不幸な歴史がありました。ようやく公民権があたえられたのが一九六七

年。こうした歴史はアボリジニの人々の社会を壊滅状態においやるに十分でした。現在先住民の人口は国民の二%弱、そのうち昔ながらのコミュニティを保っているのは大陸の中央、南西部のわずかの地域のみと比べてよい程です。

## 作者のことは

### 大切なことを伝えるお話

加藤チャコ



このティダリクのお話は大陸南東部のメルボルンから車で約三時間ほどの、ポータルバートに住むガナイ族プラトゥラング部族からうまれました。残念ながらこのあたりで昔の文化を守っている部族はほとんどありません。この話を語ってくれたガナイ族のウェインさんも、彼の両親もみなミッシュン区で育ちました。ウェインさんは二〇歳になってはじめて自分の伝統を考えようと決心した、と

いいいます。それまではひどい差別も「劣等種なのだから仕方がない」と思いこみ、なかった、とのこと。しかし彼は一念発起し、自分の部族の伝統、言葉や、神話、ダンスなどを一人で調査し、今はパフォーマンスを通してその文化の豊かさを、伝え歩く仕事をしています。

彼ら先住民の人々に伝わる神話の総称をドリームタイムといいます。みなが一日の仕事をおえ、夕食の後にキャンプファイヤーをかこみ語られるもので、生きていくうえで必要な規律や知恵、自然の法則を家族に伝える大切な行いです。

このカエルのお話にも様々な意味がこめられています。ひとりじめしてはいけないこと、武器をとって争うのではなく自分たちにできることを考えること、ユーモアの大切さ、等々。

世の中がかわるにつれ、価値観も多様に変化しています。しかし、太古の昔からかわることなく伝えられる大切なこともたくさんあります。

### 加藤チャコ



## 作者紹介

一九六三年宮城県に生まれる。ポストン美術館付属大学卒業、メルボルン大学芸術学部修士課程修了。現在メルボルンを中心に現代美術家として活発に発表を続けている。九一年日仏会館ポスター原画コンクール大賞受賞し仏政府の給費生となりパリのシテデザールに一年滞在。今年四月よりニュージーランドのワンガヌイ大学芸術学部にて客員芸術家として二カ月滞在。絵本に「まんいんでんしゃ」「ぶつかるーぶつかるー」(こどものとも)、「このこだあれ」(こどものとも0112)、「はっけよいのこったー」(こどものとも年中向き)、「こねこのウイジ」(翻訳)がある。(以上福音館書店刊)

オーストラリア在住。

絵本を子どもと読む時間は、よろこびの時間!



2000年は、子ども読書年

※1 キリスト教・英語の強制など同化政策のための保護区。 ※2 部族ごと二、三百以上あるとされる。